

本当に心をひとつにする、とは

小川典子



演奏会後、ロビーで支援募金を呼び掛ける小川さん＝4月30日、東京都内

するようだ。

一生、忘れることはないだろう。3月11日午後2時46分、自宅近くの駅で電車を待っているところだった。終わらない不気味な横揺れ。ホームにへたりこむ人々。

東日本巨大地震は、私の国を深刻な危機に誘い込んだ。前例のない地震、津波、そして原発。

ときが経つにつれて明らかに、私の気持ちは不安定になった。予定表には、3月下旬から英国や米国を回る演奏旅行が組まれている。でも、ここから出たくない。日本にいて皆と闘いたい。国際線に乗るなんて、まるで逃亡

「日本は終わってしまったのでしょうか」私の短いメールに、爆撃開始直前の中東から返事が届いた。英国某高級紙の編集長からである。「日本のために演奏会を開きなさい」そう、私が出来ることは、それなのだ。急ぎ、日本を支援するリサイクルを3月30日ロンドン、キングスプレイスで弾くことにし、勇気をもって飛行機に乗り込んだ。

「下」 ビュッシー「沈める寺」を冒頭に、それから満員の聴衆に向かって、日本の厳しい現状について説明。揺れを体験した日本人による話は、多くの共感を得られたように感じる。滝廉太

郎、武満徹、菅野由弘の作品のあと、人間の復活を信じたベートーヴェン、最後にショパンを演奏した。英国はチャリティー精神が広く普及している国である。その後の演奏会でも、GIVINGの(与える)機会を待っていたのです、と、硬貨用の募金箱に札を入れていく人々が長い列を作った。

英国と米国を周って数週間ぶりに帰国をする、希望の光を追い、努力を怠らない日本人の心意気がよみがえっている。「心をひとつに」――メディアは、青春をうたうような美辞麗句にあふれている。でも、心をひとつにするとは、どういうことなのだろうか？

今 回の地震・津波・原発に関していえば、私たちは全員が当事者なのではないか。海外からは、これからもたくさん温かい手が差し伸べられるにちがいない。

チャリティーの「慈善精神」は素晴らしい。でも、日本があるかぎり、私たちが背負っているのは、どの地方にも起こりうる厳しい気象環境を前提に生きる、運命だ。いま、自らの脚で立ち上がる力を取り戻すために、明日は我が身と思って、全員が公平に協力するべきなのではないだろうか。冬の雪にロンドンの交通が停止した英国では、「20年に一度あるかないかの雪のために、設備投資をするべきか」で大論争が巻き起こったばかりだ。比べてみると、日本がいま直面していることが、どれほどスケールの大きいことであるか、私にだってわかる。

募金箱に無記名の小銭を投げ入れる純粋な心とともに、いま、国民のひとりとして、復興につながる資金を捧げられる義務の心を、つよく持っていたい。

(おがわ・のりこ)

(ピアノリスト)